九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

英詩雑抄（試訳）：シェイクスピアから近代まで

前川，俊一

https://doi.org/10.15017/2332773

出版情報：文學研究. 68, pp.139-265, 1971-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

英詩雑抄（試訳）

――シェイクスピアから近代まで――

前川俊一

ソネット五首――ウィリアム・シェイクスピア

衆人の眼を奪う素晴らしい眼ざしを
歳月は優しい手並で造りあげながら
今度はそれに暴君の仕打ちを加え
たぐいない美しさを醜さにかえてしまう。
休憩を知らぬ「時」は夏を導いて
冬に持ちこみ、その息の根をとめてしまう。
樹液は霜に塞がれ、青々した葉は散りつくし
美は雪に掩われ、満目ただ蕭条。

そのとき夏に搾って玻璃の壁にとじこめた
液状の囚人が残されていなければ
「美」の生み出すものは「美」とともに失われ
それ自身も、面影を止める追憶も、亡びてしまう。
花の精分を抽出して置けば、冬に逢おうと
外貌は失くしても、内容は馥郁と薫りつづけるのだ。

君を夏の一日にたぐえようか。
君はもっと愛らしく、もっとおだやかだ。
風はあらっぽく　可憐な皐月の蕾をゆすぶり
一夏の期間はあまりにも短い。
天上の眼は燃えて、たまらぬ暑さのときがあり
そのまばゆい顔容もよく翳りを見せる。
そして、時の偶然と自然の経過に損われて
美しいものもいつか美しくなくなって行く。
しかし、君の常夏の色は褪せるときなく
いまを盛りの君の姿も移ろうことなく

君も死の蔭をさまようなどと「死」も豪語出来ぬ
――不滅の詩行のうちに君が久遠に生きるとき。
およそ人が息づき　眼がもの見る限り
この歌は潑剌として　君に生命を吹き入れるのだ。

甘い、しみじみとした想いの庭に
過ぎた日のいろんな追憶を呼び集めるとき
求めて得なかった数々のものに嘆息をもらし
かつて歎いた貴重な時の浪費を今更に歎く。
そのとき、永劫の死の闇に消えた愛しい友を想って
いつもは流さない涙に眼を溺らせ
事済みになって久しい恋の痛手に新しく傷つき
消えていまは亡い数多の人影をあらためて悼む。
そのとき、過ぎ去った筈の悲しみがあらたによみがえり
想いに沈みながら　悩みから悩みへと
歎き終わった歎きの負債を次々に数え上げ
まるで先に払ってなかったかのように払いなおす。

英　詩　雑　抄　（前川）

しかし、その時も、愛する友よ、君を想えば
一切の損失は償われ、悲しみは終わるのだ。

君が僕に見る年の季節は
つい先頃まで美しい歌声のした合唱席の趾
――寒々とした裸の柱列に、戦ぐ枝から
黄の葉が落ちつくすか、僅か散り残るさま。
君が僕に見るものは　夕陽の落ちたあと
西空に残る薄明の消え行くさま。
それもやがて一切を封じ去る「死」の分身
――漆黒の闇に呑まれてしまう。
君が僕に見るものは青春の燃えかすの灰を
己が息を引きとる死の床にして
わが糧でわれと我身を細らせて行く
炭火の仄かなかがやきなのだ。
これを見て、君の愛情は一入深まり
愛しがるのだ――もうじきなくなすものを。

うるわしの友よ、僕にとって、君はいつまでも若々しい。
君の眼ざしをはじめて僕が眼にしたときと
君は変らぬ美しさに見える。三年の寒い冬が
三年の夏の奢りを森から払い落した。
三年の華やかな春が黄熟の秋に変るのを
季節の推移のうちに僕は見たのだ。
いまもみずみずしい君の姿を、初に見かけてこのかた
三年の春の芳香が三年の初夏の日に燃え燻った。
ああ、しかし、「美」は日時計に射す影のよう
やどる形象を離れ行くのだ——眼に見えぬ足取りで。
君のその勾やかな肌の色も、じっと止まって見えるが
その実　動いていて、僕の眼はだまされているらしい。
それを惜しんで、言い置こう、後の世の人々よ
君たちの生れぬさきに、美の盛りは過ぎ去ったと。

熱病――ヂョン・ダン

たのむ、死なないで――君が死んだら
　僕は憎むぞ、世の女という女を。
君の冥福だって　祈らないぞ
　君もまた　女だったかと思って。

だが、わかってる、どうして死ぬことがあろう。
　死ぬとは、世を去ることではないか。
だが、君が世を去ろうとするとき
　世は蒸発する――君の息とともに。

でなくても、君は世の魂――君の去った
　あとの世は抜殻にすぎぬ。
最高の美人も　君の亡霊
　最高の男だって　腐肉の蛆虫だ。

議論好きの学者どもは　いまの世を
　焼きつくす火は何か、たずねまわるが
誰ひとり　気づかないのだ
　彼女の熱病が　それかも知れぬことを。

だが、このため、彼女は燃え尽きはしない。
　この無法な拷問が長続きなどするものか。
この大熱を長びかせるには　燃料に
　莫大な穢れが要るのだ。

この燃えさかる発作は　流れ星だ――
　燃料は　君の体内でじき尽きてしまう。
君の美しさ、君をかたちづくる肢体は
　永劫変らぬ　恒星の天だ。

だが、こやつ、長居出来ないと知りながら

君にとり憑いた気持はわかる。
僕だって、外のなにを手に入れるよりも
半時でいい、君をわがものにしていたい。

しばしの別れに、歎きをいましめて――ヂョン・ダン

行い正しい人が安らかに世を去ろうとして
自分の魂に「行こう」とささやき
涙にくれる友のうち、あるものは
いま息が絶えるといい、あるものは、まだ、という。

そのように、僕たちも、音もなく、溶けてしまおう
涙の洪水も嘆息の嵐も起こさないで。
僕たちの恋を俗人どもにさとらせるのは
僕たちの歓びを瀆すものだ。

大地の震えは惨害と恐怖をもたらし

ひとびとはその所業とその兆を測る。
しかし天界の揺れは
はるかに大きいが、被害は何もない。

俗物どもの地上の愛は
（感覚が主だから）別れてなど
いられないのだ、愛を成り立たせる要素を
それは引き離すことだから。

だが僕たちは、自分たちにも正体がつかめぬ位
純化されきった愛によって
互いの心を握っているから
眼や唇や手など　触れなくとも平気だ。

だから、ふたりの魂も実は一つ——
僕が旅立つことになっても
空気の軽さに打ち展べた黄金のよう

英　詩　雑　抄　（前川）

分かれずに　拡がるばかり。

かりに二つだとしても、そのあり方は
　コンパスの堅い脚が二本なのと同じ。
君の魂は停止する脚、動かぬようで
　動いているのだ、他の脚とともに。

そして、真中に坐っていても
　相手が遠く　さまようとき
身をななめにして　消息に耳かたむけ
　相手が戻れば　身をおこすのだ。

君もそのようであってほしい。僕は
　外の脚よろしく　斜めに走らねばならぬ。
君がしっかりしていれば、僕は正円を描き
　出発点が　終点にかわるのだ。

明けがた——ヂョン・ダン

そうよ、もう朝だわ、それがどうしたの。
だから、あなた、私をほっといて起きるの。
明るくなったからって、起きることないわ。
わたしたち、暗くなったからって、寝たでしょうか。
愛のため、暗いのも平気で来たのですもの。
明るくても平気で　一緒にいましょうよ。

光は耳がなくて、眼ばかりだけど
覗(のぞ)くだけでなくて、口がきけても
言える悪口(わるくち)は精々これ位よ——
私　素敵な気分なので、そのままこうしていたい
私　自分の魂と操(みさお)が可愛いので
それを捧(ささ)げた方(かた)から離れたくない、とね。

仕事があるから　出掛けるのですって。
恋にはそれが一番の禁物なの。
貧乏人も、醜男も、浮気者も、恋は
大目に見るけれど、忙しがり屋は駄目。
仕事をかかえて、恋をするなんて、不埒よ。
妻子をかかえて、女を口説くようなものね。

影説法——ヂョン・ダン

そこにお立ち、可愛いひと、僕　君に
愛の哲学を講釈してあげる。
　僕たちが三時間ほど、このあたりを
　散歩していた間、僕たちの生んだ
二つの影が僕たちについてまわった。
しかし、いま太陽は僕たちの頭上にあって
　僕たちはその影を踏み
　ものみなが　くっきりと際だって見える。

そのように僕たちの愛も、まだ幼くて育つ間は
ごまかしや、影や、気づかいが、僕たちから
流れ出たのだ。しかし、いまは違う。

人眼をはばかって、逃げかくれする間は
愛もまだ頂点に達していない。

僕たちの愛が正午の点に停止しないならば
今度は反対の方向に新しい影をつくるだろう。
はじめの影が人眼をくらますため
つくられたように、背後にそだつ影は
今度は僕たちに働きかけて、その眼をくらますのだ。
お互いの愛が弱まって、西に傾くならば
君は君の、僕は僕の行いを
お互いに、隠しだてするだろう。
午前の影は段々と小さくなるが
この影は終日長くなりつづける。

英詩雑抄（前川）

ああ、しかし、愛が衰えると、愛の日は縮むのだ。
愛は増しつづけるか、不断にふりそそぐ光だ。
そして正午を一分でも過ぎると、すぐ夜だ。

一周年——ヂョン・ダン

世の王者たち、寵臣たちのすべて
　世の覚えめでたいお偉方、美人、才子
いや、時の流れをつくる太陽さえも
君と僕がたがいを見染めてこのかた
丁度一歳　としをとった。
世はあげて没落の道をいそぐ。
　衰えを知らないのは僕たちの愛だけ。
これには明日もなく、昨日もない。
絶えず流れながら、流れ去ることなく
愛の最初の、最終の、永遠の一日をつづける。

君と僕の亡骸を二つの墓がかくす筈だが
一つにすれば「死」もふたりを離すまい。
悲しいこと、外の王たち同様、僕たちも
（僕たちは、お互いの王様なのだよ）
死ぬときは、真実の誓いと、甘い塩っぽい涙で育てた
この眼や耳と、最後には別れねばならぬ。
だが、愛の外を宿さぬ魂は
（外の思いの一切は止宿人にすぎぬ）
かような愛の、それとも天上でいや増す愛の、証しをするだろう
肉体が墓場へ、魂が墓場から、離れ去るとき。

そのとき、僕たちは至高の福が授かるだろう。
しかし、そのときは、外の連中だって同じこと。
地上では、王者たるばかりか、僕たちを措いて
かような王者、臣下はあり得ないのだ。
誰が僕たちほどに安泰であり得よう。僕たちの

どちらかの外、反逆者の出ようがない。
　根拠があろうと、なかろうと、恐れるのはやめにしよう。
僕たちは気高く愛し合って生きよう。
そして、年に年々を重ね、遂には六十周年の
歌を書こう。僕たちの治世はかくて二年目を迎える。

私の富——ロバート・ヘリック

　時計がなくて
夜の更け工合は知るよしもないが
　雄鶏が一羽
ときを告げて、明け方近いのがわかる。
　私には
幸いと、プルー（女中）がいて、風の吹き廻しで
　手に入れた
僅かのものを　遣り繰りしてくれる。
　牝鶏が一羽

毎日かかさず　コッコと鳴いて
　何時(いつ)
カッコよい白い卵を生むか　知らせてくれる。
　鷺鳥を一羽
飼ってるが、こやつ耳がさとくて
　ペチャクチャと
迫(せま)る危険を御注進に及ぶのだ。
　仔羊(こひつじ)を一頭
（よく馴れて）残飯で養ってるが
　母親が
この間亡(あいだな)くなって　孤児になったのだ。
　猫を一匹
置いてるが、家中を跳ねまわり
　よく肥ってる
こそ泥の鼠公(チュー)をしこたま食べて。
　それに
スパニエルが一匹。おかげで

英　詩　雑　抄（前川）

ひとりものの
田舎ぐらしが一段と楽しめる。
この連中は
心なごむ　私の玩具(おもちゃ)だ。
気苦労が
なければ、ささやかなことで、浮き浮きと心楽しい。

私の望み――ロバート・ヘリック

世がずたずたに裂ける動乱(さわぎ)にも
しゃんとした気持でいるひと
屋根が揺れうごいても
たじろがず、声さわやかに歌うひと
崩れ落ちて来ても、撥(ばち)で琵琶を
まさぐり止(や)めないひとが欲しい。

私を語る――ロバート・ヘリック

私は世の権力を恐れない。
欲しいのは　花の冠。
そして　この鬚を
酒と香油で濡らしていたい。
今日は　一切の愁いを忘れることだ。
明日も生きてると　誰が知ろう。

熟れた桜んぼ――ロバート・ヘリック

桜んぼが熟れてるよ、熟れてるよ、ひとついかが。
まんまるで　きれいだよ、さあさ、買いなされ。
だがそれは、と君はたずねる、一体どこに
生ってるのさ。――僕は答える、それ其処に
僕のデューリアの　ほほえむ唇に。

そこが生国、桜の島なのさ。
その畑に、ほら、見えてるじゃないか
何時だって桜んぼの生ってるのが。

臥所によこたわるアンシア――ロバート・ヘリック

アンシアが薄衣に身を――身の半ばを
被って臥所によこたわるとき
薄闇か、しののめの明け方に
靄のヴェールを透かし見る薔薇のよう。
かのヴェールを除くまでは薄闇。
とれば明け方が真昼のまばゆさ。

ダイアニーミに――ロバート・ヘリック

愛しの君よ、空に輝く星のような
君の双の眼を誇りたもうな。

人の心は　あげて　君の俘虜に見えても
君の心は自由だなどと誇りたもうな。
慕い寄る微風にたわむれる
君の房々した髪の毛を誇りたもうな。
君のつけている　そのルビーは
君のやわらかな耳たぶから外されても
やはり宝石であることを止めないのだよ
君の美の一切が消え去ったあともね。

桜の花に——ロバート・ヘリック

君たちは恥じらい、顔あからめ、ほほえんで
しばし　あたりの空気を　香ぐわしくする。
だが（可愛い連中よ）君たちは散らねばならぬ。
わかってるだろう、実が生ろうとしているのだ。
そのとき、ああそのとき、君たちの匂やかさはどこに行ってしまうのか
替って桜ん坊がみのるとき。

英　詩　雑　抄（前川）

乙女達よ、時を惜しめ――ロバート・ヘリック

摘(つ)めるうち、薔薇(ばら)の蕾を摘みたまえ。
　時は流れてやまない。
今日　笑(え)みこぼれている花も
　明日(あす)は　凋(しぼ)んでしまう。

赫(あか)々と空に燃える灯火(ともしび)、日輪も
　昇れば　昇るほど
旅路の果(は)ては　迫(せま)り
　落日に　近づく。

人の年齢(よわい)は　そのはじめ
　若い血の　たぎる頃が　花。
過ぎれば　段々と
　年を重ねて　品(しな)くだるばかり。

だから、遠慮しないで、若さをたのしむのだ。
　そして、折を見て、さっさと嫁ぐこと。
一度　盛りを過ぎると
　いつまでも　足踏みせねばならない。

木の花に――ロバート・ヘリック

枝たわわな実の　美しい先触れよ
　なぜ君たちは　散りいそぐのか。
　さだめの時は　まだ来ていない。
いま少し　ここにいて
　顔あからめ、やさしくほほえんで
　　それから行くがよい。

何と、君たちは　ひとときか　半ときの
　楽しみのため、生れて来て

もう「おやすみ」を言うのか。
惜しいことだ、「自然」が君たちをひけらかそうと
この世にちょいとお目見えさせて
すぐひっこめてしまうのは。

だが、君たちは愛らしい花片（ページ）、そこに我等は
読みとるのだ、どんなに美しいものも
終りはじつに早いことを。
彼等も　君たちと同じこと、ほんのちょつと
盛りを見せたあと、墓場へと
消えさるのだ。

わが詩はわが柱――ロバート・ヘリック

いますこし
書かせてもらおう。
それからすっぱり

この世におさらばだ。

私が世にとどまるか
　たたずむのは
　　一瞬のこと。
もう発たねばならない。

一切を打ち倒し
　かつて世にあった
　人々の記念碑を
殆んど留めぬ、おう、「時」よ。

なんと多くのひとが、地下の窖に
　忘れられて　眠ることか。
　死後に　名を留めず
それぞれに　朽ちて行くのだ。

見よ、私が自分に建てる
　生ける墓石を。
　妬(ねた)み深い「時」よ
お前だって、これは倒せないぞ。

記念碑を建てたいひとは
　建てるがよろしい。
　わが望み――
わが金字塔は　ここに。

サムソンの歎き――ヂョン・ミルトン

もう少し先(さき)へ、この暗い足どりに、君の導きの
手をかしてくれ給え、も少し先へ。
あそこの土手(どて)は日もよくあたり、樹蔭(こかげ)もある。
何かの折(おり)に奴隷の苦役を離れると
俺(わし)はいつもそこにすわることにしている。

でなければ　毎日　共同の獄屋に入れられ
鎖につながれて　自由な呼吸さえ
碌に出来ぬ位だ。その空気もよどんで湿っぽく
身体に悪い。だが、ここで俺は救われた気になる――
暁に生れた、清らかな、甘い風が、天上から爽やかに
吹いて来るのだ。ここで息をつくため、独りにしてくれ給え。
今日、人々は彼等の海神ダゴンのため
厳かな儀式をとり行い、一切の労役を
禁ずるのだ。この迷信のおかげで、彼等も渋々
この憩いを俺にゆるした。だから許しを得て
群衆のざわめきを離れ、この人影すくない地を選び
しばしの安息を身体に与えたい――
只、身体には幾分の休息になっても、心ばかりは
どうにもならぬ。ひとりになると
恐ろしい針をそなえた大熊蜂のよう
安からぬ思いが群り寄せて来て、過去の時
かつて俺のあった姿、いまある姿を見せつけるのだ。

英　詩　雑　抄　（前川）

＊　＊　＊　　＊　＊　＊　　＊　＊　＊

俺の不幸は

とても数多く、また大きくて、そのうちの一つでさえ
一生を費しても歎ききれぬ。しかし、その最たるもの
おう、失明よ、俺がもっとも悔むのはおまえだ。
盲いて敵中にあるとは。鎖のいましめよりも
土牢よりも、乞食よりも、老衰よりも悲惨なこと。
神が最初に創りたもうた光が、俺からは消え失せた。
そして、俺の悲しみを幾分でも和らげたであろう　眼を
たのしますいろんな事物も拭い去られた。
俺は人間と虫けらを通じて最下等のものに劣り
この点、最下等のものさえ俺にまさる。
彼等は這いずるが、眼は見える。俺は明るみにあって　暗く
日毎に欺瞞と軽蔑と、悪口と、無道の仕打ちを受け
牢内でも、戸外でも、いつも愚か者扱い
他人にすがるばかりで、ひとり立ち出来ぬ——
俺は半分も生きている気がせぬ、半ば以上死んでいるのだ。

おう、暗い――暗い――暗い――白昼の煌きの中に
とり返しようのない暗さ、昼光に戻る見込みの
全く絶えた皆既食だ。
おう、太初に創られた光よ、そして御身、大いなる言葉よ――
「光ありとのたまえば、光一切にあまねし。」
この原初の神意を　俺は何故奪われたのか。
太陽も、俺には
休暇に入って闇の洞窟にかくれ
夜を棄てた　月のよう
暗く、静かだ。
光が生に必須であり
殆んど生そのものならば、若しも　まこと
光が魂にやどり、あらゆる部分に
行きわたっているのならば、何故に見る力が
かくも傷つき易く、かくも容易に消されてしまう
眼のような脆い球に限られているのか
そして感覚のよう、眼が意のままにあらゆる毛穴を通して

英　詩　雑　抄　（前川）

見られるよう、身体全体に瀰漫していないのか。
さすれば俺も　暗黒の国の住人のよう
かくも光に棄てられて生きることなく、まだしも光のうちに
半ば死せる生、生ける死の生涯をおくり
葬られるであろう。しかし、ああ、それよりも無残なこと――
俺そのものが墓だ、動く墓場だ。
埋もれていながら
死と埋葬の特権によって
苦難の最悪のもの――苦痛と虐待をのがれることがないのだ。
それどころか、そのため一層に
凡ゆる生のみじめさを嘗め
残忍な敵の中で
囚人の生を送らせられるのだ。

内なる光――ヂョン・ミルトン

このように、年毎に

四季はめぐって来るが、私にはまたと来ることがない
白昼も、夕、朝のこころよいおとずれも
春の花、夏の薔薇の眺め
牛、羊群、さては人の神々しい面ざしも。
それに替って群雲と、永久につづく闇が
私をとりまいて、人々の楽しいなりわいから
私をしめ出し、うるわしい知識の書にかえて
造化の全所産を掩う白紙をつきつけ——
一切が、私にとっては、削除し、消し去られ
知識のはいる入口の一つはひたと閉ざされたのだ。
なればこそ、一層に、御身、天上の光よ
内を照らしたまえ。そして心を、その働きの全域にわたって
輝かしたまえ。そこに眼を植え、そこから
あらゆる霧を散らせ、きよめたまえ。私が人の眼に
見えぬ事物を見、それについて語り得るため。

はにかむ恋人に——アンドルー・マーヴェル

わたし達に存分の場所と時さえありましたら
お嬢さん、このはにかみも罪にはなりますまい。
ふたりは腰を下して、どの方角に足を運び
永い恋の日を過ごしたものか、考えあぐみましょう。
あなたはインドのガンジスの岸辺で
ルビーを見つけなさい。私は潮さすハンバーの
ほとりで己が身をかこちましょう。私は
ノアの洪水の一昔まえに恋をはじめ
あなたは、何でしたら、ユダヤびとの改宗の日まで
お拒みなさってよろしいのです。
私の恋は草木のように、いや、もっとゆっくり
帝領を凌ぐ広さに伸びひろがりましょう。
あなたの御眼をたたえ、御額に見入るために
百年が過ぎようとかまいません。

左右それぞれの御胸をあがめるのに二百年
その他をたたえるのに三万年
おからだの各部に少くとも一時代
そして最後の時代に御胸の内をお明かし下さって結構です。
お嬢さん、あなたはそれ程の勿体に　価する御方です。
それよりもお手軽な恋は、私もしますまい。
しかし、私の背後には何時もきこえるのです
身近に迫る「時」の翼車の羽ばたきが。
そして彼方、ふたりの前にひろがるのは
広漠とした「永遠」の沙漠です。
そのうちに、美しい御姿も見られなくなり
大理石の御納骨所に　私の歌も
響かなくなりましょう。そのとき蛆虫どもは
永らく守られて来た処女の誇りを犯し
あなたの依怙地な操も塵と化し
私の情欲もあげて灰に帰するのです。
お墓は人目につかぬ　結構な場所ですが

そこで抱き合うひとはいますまい。
ですから、いまもなお　若々しい色が
朝露のよう、あなたの御肌にやどるうちに
あなたの燃えたつ魂が　全身の気孔から
切ない炎をゆらめかすうちに
さあ、楽しめる間にお互いを楽しみましょう。
そして、「時」の歯で小刻みに砕かれ、衰えて行くよりも
いまこそ、情深い猛鳥のよう
一挙にふたりの時をむさぼりつくしましょう。
さあ、ふたりの力と優しさの一切を
くるめて一個の弾丸と化し
生の鉄門をぶち抜くよう、渾身の力を
ふりしぼり、ふたりの悦びを押し通しましょう。
わたしたちの日を　停める術はないにしても
こうして彼を走らせることは出来るのです。

庭園――アンドルー・マーヴェル

棕櫚か、樫か、月桂樹の栄冠を得ようとして
何と空しいあがきを人々は費すことか。
彼等の不断の労苦でかち得るものは
一本の草か木にすぎず
その短くて狭い葉の投ずる影は
賢しくも彼等の骨折りをたしなめる。
外のあらゆる花や樹は相寄って
安息の花環を織り成すのだ。

「静寂」の君よ、私はここに御身と
御身の妹君「無垢」を見出した。
私は久しく誤って、御身を
人々のにぎやかな集りのうちに求めた。
御身の聖なる草は、地上に生えるとすれば

草木の間にのみ育つであろう。
このいみじい孤独にくらべれば
社交場裡も　野蛮に近い。

この惚れ惚れする緑の美しさには
雪の膚も、朱の唇も及ばない。
恋に酔う若人たちは　心中の炎のように残酷に
これらの樹々に　愛人の名を彫りつける。
ああ、彼等は知らないか、知ろうとしない——
樹々の美しさは　遥か　彼女の美にまさることを。
麗しの樹々よ、君たちの皮を私が傷つけるとき
そこに　君たちの外の名は見あたるまい。

われらの燃える血が　たぎりつくしたとき
愛はここに至上の隠れ家をいとなむ。
神々が美女を追うときも
その追求は常に樹に終った。

アポロがダフネを狩ったのも
彼女が月桂樹と化せんため。
パンはシリンクスを追って走ったが
捉えたものはニンフならぬ一管の葦だつた。

ここで送る私の生活の素晴らしさ——
林檎は熟れて私の頭上に落ちかかり
葡萄のおいしい房はつぶれて
私の口に美酒を滴らす。
甘露桃、珍種の桃は
彼等からすすんで私の手にとどき——
歩み行くとき　私はメロンに躓き
花に足とられては　草の上にまろび伏す。

その間に、心は卑小な歓楽から
こころ自体の悦びへと身をひそめる——
凡ての種のものが　ぴたり　その対応物を見出す

大海である　心――
しかし、その心はこれらを超えて
遥か異象の世界と異象の海を創り成し
つくられた一切を滅尽して
緑の蔭の緑の想いに化せしめる。

ここ、噴泉のなめらかな脚下に
または苔蒸す果樹の根元に
肉身の衣を脱ぎすてて
わが魂は樹の枝へとすべり入り
小鳥のよう　そこに棲まってうたい
白銀の翼をととのえ、くしけずり
長い飛翔にそなえて　その羽毛に
いろんな光を波打たせる。

かの楽園の有様もこのようであったのだ――
そこを男が　配偶なしに歩んだ頃。

このように浄らかな、たのしい場所を得て
外にどんな手助けがふさわしかろう。
しかし、そこをひとりでさまようのは
所詮　人間の運命を超えるものだった。
楽園にひとりで住むことは
二つの楽園をひとつに合わせることだろう。

何と器用に　老練の庭師は
花や草でこの新しい日時計をつくったことか。
頭上からふりそそぐおだやかな日は
香ぐわしい十二宮をめぐり行き
その運行につれて、せっせと蜜蜂は
私等と同じように　時を数える。
かくも楽しく、すこやかな時を
草や花を措いて、数える手段があろうか。

後退――ヘンリ・ヴォーン

天使のあどけなさに輝いていた
幼い頃の楽しかった日々――
この世をまたの生涯にあてられた地と
まだ納得の行かなかったころ――
私の魂が　白一色の神々しい想いの外
想像を馳せることを知らなかったころ――
私がはじめて愛した方の御許から
一哩か二哩を越えて踏み出したことがなく
（僅かの距離を）ふりかえると
その方の輝かしい御顔が　微かに見られたころ――
金色の雲や花を　半時も
私の魂が飽かず眺めつづけ
その淡い光輝のうちに
「永遠」の影を感づいていたころ――

私の舌が罪深い声音(とねね)で
良心を傷つけたり
妖術で感覚のそれぞれに
罪をふりあてることを知らず
この肉の衣(ころも)を通して　永生の芽生えを
感得することの出来たころ――
　ああ、引き返して　昔あゆんだ路を
ふたたび辿(たど)りたいと　どんなに願うことか。
私がはじめてあの輝かしい行列と別れた
あの平原にいま一度行って見たい――
その地から、浄光にきよめられた魂は
影深い棕櫚の都が望み見られるのだ。
しかし（ああ）私の魂はあまりにも久しい滞在に
酔い痴(し)れて道行く足元(あしもと)も覚束(おぼつか)ない。
前をのぞんで進みたがる人もいるが
私はもと来た道を引きかえしたい。
この身が塵(ちり)と化して壺にはいるとき

英　詩　雑　抄（前川）

生れた時のままで帰って行きたい。

滝――ヘンリ・ヴォーン

時のひそやかな歩みの中に、何という深いささやきをもって
君の透きとおる、冷やかな、あふれる水が
　ここを流れ下ることか
　そして、叱り、呼ぶことか
あたかも、彼につづく、なよなよした、たよりない水が
この断崖に怯え、渋り、たゆたうかのように――。
　それは――鏡のように明らかなこと――
　誰彼を問わず、飛び下りねばならぬ
　世の常の途だが
　そこが終りではなくて
この深い、岩の奥津城で、更に元気をもりかえし
更に明るく、輝かしく、更に長い旅路に向うのだ。

懐かしの流れよ、私がよく腰を下して
冥想の眼をたのしませた、懐かしの堤よ
君の動いて止まぬ水の、どの一滴も
まえに流れ出たところにまた流れ行くのであるから
（言うまでもなく）光の海から来た　人の魂が
影や夜を恐れるわけが　どこにあろう。
これらの滴は、そのまま一滴残らず
君のところに送りかえされるのであるから
召し上げられたものを、神が返して下さらないかと
はかない現身で　疑ういわれがどこにあろう。

おう、有用で、清らかな原素よ
ここで私を洗い、浄める　聖なるもの——
小羊のあゆむ　生命の泉に
はじめて私をゆだねたものよ
何という気高い真理と　すこやかな主題が
君の神秘の、深い流れにやどることか。

それは原初に君の面にただよって
あらたかな愛で万物を孵した
精霊が心を導かぬかぎり
愚鈍な人間の見出し得ないものなのだ。
この音たかい小川のおやみない流下は
流れの輪をつくり、すべてを淀ませ
やがて堤に達して
見えなくなるが、そのように人も過ぎさる。
おう、私の未だ眼にしない境涯よ
来たること遅い、栄光に充ちた自由よ
君こそは、そこに滝も、入江もない
私の求める水路なのだ。

ベリンダ――アレクザンダー・ポウプ

深紅に大海を染めて　空にさし昇る
日輪もさほど輝かしくはない

それを凌ぐ光の主が姿を見せて
白銀のテムズに繋かる船に歩を運ぶとき。
佳人、美服の貴公子連で、辺りもまばゆいことながら
衆目の的になったのは彼女ひとり。
雪をあざむく胸には燦然と十字架が懸り
猶太の徒も接吻し、異教徒も崇めんばかり。
潑剌とした顔容は、その眼のようにすばしこく
動いてやまぬ心を顕していた。
誰にも微笑をよせながら、誰にも心寄せず
よく申し出を拒みながら、誰の心も傷つけず
眼は太陽のまぶしさに万人を射て
四海平等　万人を照らすのだ。
そのたおやかな物腰と気取らぬ愛くるしさは
優に欠点を隠すに足りたが、そも、隠す欠点など美人にあるかどうか。
女性に免れぬ過ちが彼女にあったとしても
その顔を仰ぎ見たまえ、一切は忘れ去られる。
この美女の育んでいた――人類を滅ぼしかねぬ――

英　詩　雑　抄（前川）

二束の髪の毛は　等しいうねりをなして
輝く捲毛とともに、背をなだらかに流れ
滑らかな雪白のうなじを飾っていた。
愛はこの迷宮に男を誘き入れて奴隷と化し
蓋世の英雄も　か細い鎖につなぎとめられる。
我等は毛のわなで小鳥を欺き捕え
毛の糸でうまうまと魚を釣りあげる。
美しい髪の渦は王侯をもわなにかけ
美は髪一筋で我等を引き寄せるのだ。

田舎の墓地でよんだ哀歌——トマス・グレイ

入相の鐘は逝く日を葬い
　牛の群は鳴きつれて野をうねり行く。
疲れた足どりで農夫は家路をたどり
　大地は闇と私にゆだねられる。

仄明るい眺めは視界から消え
　おごそかな静寂があたりを領する。
きこえるものは甲虫の飛びまわる鈍い羽音
　遠くの羊群を眠りにさそう眠たげな鈴の音。

それに、己が隠れ家のあたりを徘徊して
　古くからの閑寂な縄張りを荒らす輩を
蔦に埋もれた彼方の塔から
　月に訴える陰気な梟の声。

肌荒れた楡の木や　いちいの蔭に
　芝生の高まって累々と塚をなすあたり
狭い部屋部屋に永久によこたわって
　村の朴訥な先祖たちは眠る。

芳香を運び来る暁の微風も
　葉小屋を飛び交う燕のさえずりも

雄鶏のつくる高らかなときも、こだまする角笛も
もう彼等をいぶせき寝間からおこしはしない。

彼等のために炉端に赤々と火が燃え
主婦が夕餉の支度にいそしむこともない。
父の帰宅に　子供が廻らぬ舌でかけより
われがちの接吻におくれじと、膝にのぼることもない。

幾度か稔りは彼等の鎌に刈りとられ
屢　彼等の鋤にかたくなな土も崩れた。
いとたのしげに彼等は馬を畑に追い
その力強い斧に森はわけなく平伏した。

「大望」も彼等の役立つ労役とささやかな悦びと
無名の生涯をさげずんではならぬ。
「威権」も貧しい輩の簡潔な記録を
侮蔑の笑をうかべてきいてはならぬ。

名門の誇り、権力の華やかさ
　美が与え、富の与えたすべてを
待つものは等しく必滅の時――
　栄光の道は墓場につらなる。

聖歌のオルガンが長い側廊と格天井に
　讃美のしらべを高らかにひびかせるところ
彼等の墓に「追憶」が記念の標を掲げずとも
　驕れるものよ、彼等を咎めてはならぬ。

閲歴を語る壺が、活けるがごとき胸像が
　離れ行く魂を元の居所に戻し得ようか。
「栄誉」の声が沈黙の塵をよびおこし
　「阿諛」が「死」の鈍くつめたい耳を慰め得ようか。

天上の火をやどした心臓が

帝主の標をも握り、竪琴をめざまして
恍惚の調べに昂め得た手が
忘れられたこの地に眠るかも知れぬ。

しかし「知識」は彼等のまえに「時」の獲物を満載した
豊かな頁を繰りひろげなかった。
つめたい「貧困」が彼等の高貴な情熱を抑え
天来の魂の流れを凍らせてしまった。

数知れぬ澄んだ輝きの至純の珠を
底知れぬ深海の暗い洞窟が生み
数知れぬ花が、見る人もなく咲き匂っては
空しい芳香を沙漠の大気に漂わす。

畑地の小暴君に不屈の胸で立ち向かった
村のハムプデンがここに眠るかも知れぬ。
また、黙せる無名のミルトンが——

同胞の血を流さなかったクロムウェルが。
元老連に耳傾けさせて、喝采を博し
苦難や破滅の脅かしに屈せぬこと——
巨財を散じて国土を微笑ませ
国民の眼のうちに己が閲歴を読むことは
彼等の宿命がゆるさなかった。その徳の伸張を
妨げたものは　その罪過をも限ったのだ。
彼等は血の河を渉って王座につくこともなく
人類に慈悲の門を閉ざすこともなかった。
真実を知る内心の悩みを隠し
正直の面に浮ぶ恥らいを消し
詩神の炎に薫香をたいて
「豪奢」と「権勢」に供えることもなかった。

狂乱の群のあさましい闘いをよそにして
　彼等の平静な望みは歩みをたがえず
涼しく幽寂な人の世の谷間に沿って
　平穏無事の道を歩んだ。

しかし、これらの骨を侮りから護るため
　傍に立てられたはかない記念碑が
拙い詩句と不出来な彫刻で飾られ
　行きずりの嘆息の供養を求める。

無学なうたびとの綴る姓名と享年が
　名声と挽歌の代りをつとめる。
彼はふんだんに聖書の言葉をちりばめ
　田舎の道学者に死に処する道を教える。

無言の「忘却」の餌食となつて
　楽しくも哀しいこの生をあきらめ

こころよい日射しの暖かい地を去るとき
　去りがての眼をあとに投げぬ者があろうか。
逝こうとする魂は慈愛の胸に依ろうとし
　閉じようとする眼は親なつかしの涙を求める。
墓場からでさえ「自然」の声は叫び
　われらの灰にさえ、もとの火の余燼は燃える。

無名に終った人々への心遣りから
　この詩に素朴な生涯を記す者よ
もしも孤独の冥想に導かれて
　似た心の持ち主が君の身の上を尋ねるならば
恐らくは、白髪の野の人がこう答えるであろう――
　「よく見かけましたよ、夜の明け初める頃
昇る日を丘の芝生で迎えようと
　急ぎ足に露を払って道行くところを。

英　詩　雑　抄　（前川）

向うに揺れるぶなの木の老いた根が
　高々と奇怪にわだかまるあたり
昼日中その方は物憂そうに寝そべって
　傍のせせらぎを見つめているのです。

あの森のはずれを、嘲るような微笑をうかべ
　勝手な空想を呟きながら、さまよい歩くのです
時にはうなだれ、悲しみに色青ざめて寄る辺ない人のよう
　時には　煩いに心乱れたか、恋に破れたひとのよう。

ある朝、この方は　いつもの丘にも
　荒野にも、馴染みの樹のそばにもいませんでした。
翌朝も、依然、小川の畔にも
　芝生にも、森にも、見あたらないのです。

次の朝、ふさわしい挽歌とともに、悲しい葬列が

この方を静々と墓地へ運んで行きました。
近寄ってお読みなさいまし（貴方さまは字が読めなさる）
あの山査子の古木の許の石の碑文を。」

碑銘

此処、大地の膝に枕して眠るは
幸運にも名声にも無縁なりし若者。
「学問」は彼の卑き生れに眉ひそめなかった。
「憂鬱」は彼を目して彼女のものとした。

彼は恵みを惜しまぬ　誠実の人。
天も彼に、劣らぬ報酬を与えた。
彼は「悲惨」に（彼の持てる凡て）涙をそそぎ
天は彼に（彼の欲する凡て）友を与えた。

これ以上、彼の美点を顕し

彼の欠点を発くのを控えよう。
いずれも、おののく希望のうちに
彼の父、彼の神の御胸に安らかに憩うものを。

ポプラの野辺――ウィリアム・クーパー

ポプラの群は伐られた。さようなら、樹蔭よ
涼しい並木をわたる葉摺れのささやきよ。
風はもう葉蔭にたわむれ、歌うことがなく
ウーズ河もその胸に彼等の影を宿すことがない。

私のいつくしむ野と　この木立の茂る堤を
はじめて見渡した時から　十二年が過ぎ去った。
そして、見たまえ、いま彼等は草むらに横たえられ
かつて私に蔭をかした樹に、私はいま腰を下している。

鶫は別の隠れ家に飛び去ってしまい

榛の木の茂みが暑熱から彼を防いでいる。
以前、彼の鳴く音に私のきき惚れた場所も
その快い調べを　もう　こだましはしない。

私の年月は飛ぶように　あげて急ぎ去り
やがては彼等のよう、私も身を横たえねばならぬ
芝草を胸に、石を頭上に置いて――
似たような　別の林が　替って伸び茂る前に。

その眺めは　何ものにもまして　しみじみと
ひとの歓びの過ぎ易さを　私に思い知らせる。
ひとの一生は　まこと夢のようだが、その歓びは
それよりも　更に果敢ないものなのだ。

展望――ウィリアム・クーパー

いままでにもう幾度、歩みをゆるめて

向うの頂に足をとめ、吹く風に
さらされながら、それにも気づかず
感嘆に眼を見はり、飽くことを知らないで
あたりの景色に見入ったことか。
それから、何というたのしさで、見きわめたことか
遠方に犁がゆるゆると動き、その傍に
馬群が黙々と　真一文字の跡をひき
たくましい農夫が遠く小さく、童のように見えるのを。
近くにはウーズ河が　牛群の散らばる
広い牧場の原を　悠々とうねり
くねくねした流れに沿って、うれしげに
見る眼を導くのだ。向うの堤にしっかと根をおろし
あたりの一切を見下して、われらの寵児――楡が聳え
牧夫の一軒家をさえぎり隠している。
そして、遥か遠く――硝子を溶かして
谷間にはめこんだような流れの向うには
土地が徐々に高まって雲につらなり

そのとりどりの斜面に見られるのは
美しい生垣の無数の並びと角壁の塔
丁度いま、私の耳に、低く、また高く
にぎやかな鐘の音をつたえる高い尖塔
森、荒野、そして遠い彼方に、煙をあげる村々。

山上の眺め——ウィリアム・クーパー

頂上にたどりつくと、見たまえ、いただきを飾る
誇らしげな四阿を。しかし、この結構な構えも
田舎者の彫り手の悪戯をふせぎ得ない。
彼等は羽目板をナイフでいためつけ
ぶざまな文字と間違った綴りで
読みにくい、お粗末な名を残すのだ。
人間の胸には己れを不朽化したい願望が
何と強く脈打っていることか——空しい忘却という
いまわしい深淵から掠め取ったほんの数年が

田舎者の身にも　素敵な儲けもののように
思えるらしい。さて、あたりに眼を移そう。
冥想をそそる　この高みに立って
素晴らしい眺望に眼は恍惚となる。近くの羊小舎は
純白の住まい手を草原に吐きいだす。
彼等ははじめ　川の流れのようにぞろぞろ縦列をなし
中央の野にすすむ。それから次第にちらばって
好みの場所をえらび、直にあたり一面を白くしてしまう。
向うの、かんかんに干した乾草場から、戻って来るのは
荷を満載した車。それと行きちがう車は
荷を下し、身軽になっていて、するすると通り抜ける。
荒っぽい馭者は　追う馬群の上に身をのりだし
のろくささをもどかしがって大声にわめく。
林のたたずまいも　それらに劣らず　眼を惹きつける。
老若さまざまの木が入り交り
似ているようで、みんなちがう。近くにはとねりこの
灰色の滑らかな幹、しなのき、ぶなが、それらの遠い影の

薄闇の中にあって、くっきりと輝いている。
向うには、隆起した土地の後にかくれて、林が
沈下したよう、縮まり、梢の先だけが見えている。
森中のどんな樹もそれ特有の色合いをもち
それぞれに魅力がある。ある樹は蒼白んで
青味を帯びた灰色とでもいうか。柳がそれであり
葉に白銀の裏打ちをしたポプラがそれだ。
それに、腕を長々と伸ばして蔭をつくるとねりこの樹。
楡の木は緑がより濃く、それよりも更に濃いのが
永の年月を生き抜いて来た森の王者――槲だ。
葉がつやつやとして、日射しに輝く樹がある――
かえで、油気たっぷりの実をどっさりつけるぶな
それに、露の下りる夕暮に芳香をただよわす
しなのきがそれだ。それから、眼立たずにいないのは
装いの気まぐれなシカモアかえで――
緑かと思えば、褐色にかわり、まだ秋が
林の色を変えないうちに、深紅の色に輝くのだ。

英　詩　雑　抄（前川）

これらを飛び越えて、ずつと向うに（丘や谷の
広大な地図を間にはさみ）
ウーズの流れが、灌漑のゆたかな土地を二分し
陽光に輝くかと見れば、日蔭にかくれ
はにかみながら、見られたがるのだ。

冬の朝――ウィリアム・クーパー

朝だ。赫々と円い太陽が昇って
地平線を燃え立たせる。また、吹く風に
一団となった雲は　日輪が徐々に
姿あらわすにつれ、色を深め
枯木の林を通して見ると
まるで燃えさかるどこかの都市のようだ。
その斜の光は弱々しく雪の谷をすべり流れ
一切を　特有の薔薇色に染めながら
あらゆる草と尖った葉っぱから

長々と影を　野に投げかける。
私は　恐ろしく長い先細の影となり
成程、自分は過ぎ行く影であったかと
真面目に、賢人の言葉を思い返しても
笑い出さずにはいられない。横眼で見ると
たくましくつり合いのとれた四肢が
か細い臑になっていて、その無様な一対が
まるで私をからかうように、私のかたわらで
一歩あゆめば一歩すすむのだ。私が小屋に近づくと
漆喰の壁を、途方もない姿になって
あるきまわる。――胴体をなくした脚だ。
目くらむばかりの光の洪水の下に
緑の平原は深く埋もれて横たわる。ぬかぼや
外の草から抜きんでている太い雑草は
さっきまで見栄えせず、気にもとめられなかったが
燦然と輝き、きらびやかな衣裳をまとい
氷の羽根をつけて、眼もあやに揺れている。

英　詩　雑　抄（前川）

塀で隔てられた片隅に牛の群は低くうめき
石のよう　身をこわばらせ、悲しげに立ったまま
まるで眠っているように見える。そこに彼等は
おしきせの飼葉を待つのだ。食べ物が来ないのに
いらだつ、飢えた人間のようでなく、静かに、おとなしく
辛抱強く、のろくさい農夫の手当を待つのだ。
農夫は　どっしりした一塊に幅広の鋭利な庖丁を
深々と切りこみ、また深々と幾度も切りこんで
乾草積みからいつもの量を切りとる。
切り残しのたばは　まるで壁のように滑らに立っている。
そのように真直に均等の力を加えて
彼はこのたばを切り離すのだ。嵐のために
残りのたばが傾き倒れるとか、自分でバランスを
崩すおそれなどすこしもないのだ。
木樵は、向うの淋しい森で
――それは朝から夕方まで、彼ひとりきりの仕事なのだが――
手斧をふるい、くさびを打ちこもうと

人々の賑やかな集りを　余所事に見て立ち去る。
毛むじゃらで、痩せて、すばしこく、尖った耳をして
尻尾は短く切られ、半ば猟犬、半ば野犬――
彼の犬がつきしたがう。彼のすぐあとを
のろのろ歩くかと見れば、しきりと尻尾をふり立て
大股で駈け出し、たまった雪を白い牙で
はね上げたり、鼻で雪を掻いたり
からだの雪をぶるんと振いおとし、うれしげに吠え立てる。
そのようないたずらには一向にかまわず、この逞しい男は
さっさと行く先に急ぎ、何があろうと止まらない。
しかし、時折、彼の煙管を親指で押して
香よい詰めものをうまく加減し
その煙は鼻の下から漂い出る。白煙はたなびいて
彼のはるか背後に流れ、あたり一体を香ばしくする。

羊飼――ウィリアム・ブレイク

羊飼(ひつじかい)は何という楽しい身分。
朝(あさ)から夕方までさまよい歩き
日がな一日羊の群を追っている。
口にするのは誉め言葉ばかり。

その筈だ、彼は仔羊(こひつじ)の無邪気な声をきき
母親の羊のやさしい返事をきいているから。
彼等が長閑(のどか)でいるときも、彼は注意を怠らない。
彼が傍(そば)にいるのを彼等は知っているのだ。

仔羊――ウィリアム・ブレイク

仔羊(こひつじ)君、誰が君をつくったの。
誰が君をつくったか、君知ってるの。

誰が君に生命をさずけ、川のそばや
牧場で草喰むようになさったの。
ふさふさと輝いて　柔かな
悦びの衣をくださったの。
とてもやさしい声を君にさずけ
谷々を明るくこだまさせたの。
　仔羊君、誰が君をつくったの。
　誰がつくったか、君知ってるの。

　仔羊君、教えてあげよう。
　仔羊君、教えてあげよう。
そのかたは　君の名で呼ばれる。
そのかたは　御自分を仔羊と呼ばれる。
そのかたは　やさしくておだやかだ。
そのかたは　幼児になられた。
僕は幼児、君は仔羊。
僕たちは　そのかたの名で呼ばれる。

仔羊君に　神のおめぐみを
仔羊君に　神のおめぐみを。

嬰児の悦び――ウィリアム・ブレイク

「僕　名がないの。
僕　二日前に生れたの。」
君を何と呼ぼう。
「僕たのしいの。
僕の名は悦び。」
初々しい悦び　君の上にあれ。

可愛い悦び
生れて二日目の　初々しい悦び
初の悦びと君を呼ぼう。
君はにっこり
僕はうたう
初々しい悦び　君の上にあれ。

笑いの歌――ウィリアム・ブレイク

緑の森が悦びの声あげて笑い
小川がさらさらと笑いさざめいて流れ
僕たちの冗談であたりの空気がはずみ
それをこだまして緑の丘が笑うとき。

いきいきと緑の色に牧場(まきば)が笑い
楽しい眺めにきりぎりすが笑い
メァリとスーザンとエミリが
可愛い口をまるめて「ハッハッハッ」と笑うとき。

小鳥が色あざやかに樹蔭で笑い
僕たちの食卓に桜んぼや胡桃がならぶとき
さあさ、元気で、一緒にうたいましょ
「ハッハッハッ」と楽しいコーラスを。

英　詩　雑　抄（前川）

こだまする野辺――ウィリアム・ブレイク

日は昇り
空はなごむ。
春を迎えて
にぎやかに鐘が鳴る。
雲雀と鶫
藪の小鳥は
陽気な鐘の音に
声はりあげる。
その時、僕たちの遊びが
こだまする野辺に見られる。

白髪のヂョン爺さんは
年寄の連中と
槲の根元にすわり

つらいことも忘れて笑う。
連中は僕たちの遊びを面白がって
一緒に語り合うのだ
「俺(わし)らがみんな、童(わらべ)や娘(むすめ)の頃
このように楽しかったものだ――
若さ一杯で
こだまする野辺に見られた頃。」

そのうち子供らは遊び疲れて
元気でなくなり
日は落ちて
遊びはおしまいになる。
母さんのお膝のまわりに
大勢の兄弟姉妹が
ねぐらについた小鳥みたい
いまにも寝入りそうにしている。
遊びはもう見られない

英　詩　雑　抄　（前川）

――暮れて行く野辺に。

病める薔薇――ウィリアム・ブレイク

おう、薔薇よ、君は病んでいる。
荒れ狂う嵐に
闇を飛ぶ
眼に見えぬ虫が

君の寝床に
深紅の悦びを見出した。
そして、その暗く、ひそかな愛が
君の命を蝕んで行く。

ああ、向日葵よ――ウィリアム・ブレイク

ああ、向日葵よ、君は時に倦み

太陽の歩みをかぞえ
旅人の旅路のはての
黄金の楽土を求め——

その地へ、あこがれにやつれ果てた若者も
雪白の衣をまとった　蒼白の処女も
墓場から身をおこし、昇って行くのだ
僕の向日葵の　行こうと願うところに。

田舎の夜——ウィリアム・ワーズワス

昼間はきこえなかった谷川のささやきが
いまは仄かにきこえ、私の家路をなぐさめてくれる。
大気はしんとして、淀む水のよう
空霊の丘の調べに耳かたむける。
静けさを破るものは、低く、ものうげな時計の打撞
渡し守を眠りから覚ます対岸の呼び声

やがて、岸辺を離れる空ろな擢のひびき
向う岸に近づく馬の蹄の音
湖面をつたわって来る、木戸を閉ざす物音
驚いて草喰みをやめ、麦畑をさやさやと走り去る兎
ふるえ声で、訴え、すすり泣く梟の叫び
長い間を置いてきこえる、水車小屋の犬の鳴声
遠くの鍛冶屋の振う鉄槌の、底ひびきのする音
それに、森の深みからひびいて来る、山犬の遠吠え。

ウーリー湖の夕陽——ウィリアム・ワーズワス

嵐だ。霧に隠れて、片時も止むことなく
終日、河は轟々と水音を増して行く。
佗しい疾風が、安住を得ぬ亡霊のよう
甲高い空ろな声で湖岸を荒れ狂う。
やがて、西の野を歩む日が見えそめ
雲の彼方から　楯を閃かす。

嵐の只中に、きらり眼を射るのは
悠然と、夕日に燃えて、舞う鷲の影。
東のかた、目路もはるかに濡れ輝くのは
湖上にのしかかるような、森をいただく断崖の連り。
広大なアルプスの峰々に懸る一百の滝が
突如、金色の炎の柱となって顕れる。
天日が溶けて西一面にひろがったような
まぶしさを　農夫は帆影に避ける。
烈火のよう、真赤に燃えさかる山々は
この巨大な坩堝の中に、薄れ、消え行くのだ。

スノウドン登頂——ウィリアム・ワーズワス

夏の夜だった。青白く、どんよりして、変に明るく
蒸し蒸しする暑い夜で、濃く、低く垂れた霧が
雨滴をしたたらせ、全天を掩っていて
嵐か雨になりそうな気配もしたが、私たちは

何のためらいもなく出発した――張り切っていたし、それに
老練の道案内を信頼していたので。あたり一面
湿っぽい霧にかこまれて、殆んど何も見えなかった。
そして、案内者と旅行者にありがちの話を
交したあとは　みんなだまってしまい
それぞれに自分ひとりの思いに耽っていた。
こうして一行は険しい坂をのぼり、その間私は
自分の黙想を妨げるものを何一つ
見も、聞きもしなかった。只、一度
羊飼の雑種犬が山の岩角から
はりねずみを追い出し、大変な喜びようで
そのまわりを仰々しく吠え立てた位のもの。
このささやかな珍事も――あの荒涼とした場所で
しんとした真夜中にはまさにそのように思えたが――
収まり、忘れてしまうと、またみんな前のように黙って
くねくねした道をたどった――額を大地に
近づけるようにして、まるでむきになって

敵に立ち向うかのように。私は懸命の足どり
心もひた向きになって、喘ぎ喘ぎ登った。
このようにして、互いに離れ離れになりながら
およそ一時間はのぼったろうか——
たまたま私は一行の先頭になっていたが
何だか足下の地面が明るくなったように思え
更に一、二歩すすむと、一層明るくなったようで
自分でも、どうしてそうなったか、尋ねる暇もないうちに
突然、芝草の上に一条の光が
閃くように射して来た。見まわすと、何と
月が皎々と天上に——私の頭上、無限の高さに
照っているのだ。そして私は広大な霧の海の
岸辺に立っているのだった。
その霧はおだやかに、音もなく、私の足下にひろがり
このしんとした大洋をめぐって、無数の峰々が
薄黒い背を聳えさせていた。そして、その彼方——
遥か、遥か彼方にまで、この霧が突き出して

いろんな岬の形をとりながら
海に、本物の海につらなっているのだ。その海は
眼のとどく限り、縄張りを侵されて、小さく縮かんでしまい
その壮大さを明け渡してしまったみたいだった。
その間、月がひとり皎々と　この光景を
眺め下し、私たちは足下を霧に洗われながら
立っていたのだ。そして、この岸辺から
三分の一哩とへだたりのない個所に
青い亀裂があった。それは霧の裂け目
——深く、薄暗い、息の通う口で、そこを通って
数知れぬ河、激流、小川のとどろきが
渾然と一つの声になって、湧き上って来るのだ。
この広大無辺の眺めはすべて
ひとが感嘆し、歓喜するためにつくられたもので
それだけで壮厳そのものだったが、あの、何処からともない
水音の湧き上って来る裂け目
——あの暗く、深い通路にこそ、自然は魂を

万物を光被する想像力を宿らせたのだ。

詩人の夢——P・B・シェレー

詩人の唇の上に私は眠った
彼のもらす息づかいをききき
恋の手だれのように夢みながら。
彼は人の世の幸を求めも見出しもしないで
心の曠野を去来する物影の
空霊の接吻を糧にして生きる。
彼は見まもるのだ——明け方から薄暮にかけて
湖の照り返しをうけた陽光が
蔦の花にとまる黄の蜂を輝かすさまを。
それらは何か、彼は気にもとめず、知りもしないが
これらのものから創り出すことが出来るのだ
生身の人間よりも真実なものを
不滅の存在の賚い子たちを。

英詩雑抄（前川）

西風に寄せる歌——P・B・シェレー

I

おう、奔放の西風よ、君、秋の息吹(いぶき)よ
君の見えない姿から　死せる葉が追い散らされるのだ
魔法使いから逃げ出す亡霊の群のよう

黄に、黒に、青白く、労咳病みのように赤く——
疫病にとり憑かれた群衆だ。おう、君
羽根の生(は)えた種子を暗い、冬の寝床に

駆り立てるものよ。そこに彼等はつめたく埋まって
それぞれ、亡骸(なきがら)のように墓場に横たわるのだが
そのうち、青衣をまとった君の妹の春風が

夢みる大地に嚠喨と喇叭を吹き鳴らし
（愛らしい蕾を羊群のように空にまき散らし）
いきいきとした色と香りで原や丘をみたすのだ。

いたるところ動いて止まぬ　奔放の精よ
破壊者と守護者よ、聴け、おう、聴け。

Ⅱ

君の流れに乗って、高層の大気の激動の中に
千切れ雲が「空」と「大洋」のもつれ合った枝から
地上の病葉のように吹き散らされる。

彼等は雨と稲妻の使者だ。君の
大気の波の湧き立つ紺碧の面に
――すさまじい酒神巫女の頭から

逆立つ明るい髪の毛のよう――薄暗い地平の涯から

天頂の高みにまでも　ひろがるものは
近づいて来る　嵐の髪の毛だ。君は

逝(ゆ)く年の挽歌だ。そして、いま暮れようとする夜は
君の強大な力の呼び集めた雲霧の構築する
広大な墓場の円天井(ドーム)となるだろう。

霧のたちこめる　この重苦しい大気から
黒い雨と霰(あられ)がほとばしり出よう、おう、聴け。

Ⅲ

君は　紺青(こんじょう)の地中海を
夏の夢から呼び覚ましたが、彼は
その水晶のような流れを揺(ゆ)り籠(かご)にして

ベイイーの入江の溶岩の島のほとりに眠り
波間にひときわ強く陽光の射しこむ日に

古びた宮殿や、塔の群がゆらめくのを夢みていた——

それらはすべて　青い苔や花に蔽われ
とても美しくて、想っただけで気が遠くなりそうだ。
君のため、大西洋の平らかな海面は

おのずから裂けて狭間をつくり、深い海底では
樹液の通わぬ葉群をつけた
海の花や　ぬめぬめした海草の林が

君の声をききつけて、恐怖にたちまち灰色に変り
震えおののいて、葉を散らすのだ、おう、聴け。

Ⅳ

もし僕が　君に運ばれる枯葉であったならば
もし僕が　君とともに翔る雲であったならば
そして、よし、君程に自由でなくとも

君の力の下に喘ぐ波として、君の力強い
衝動をともにし得たならば、おう、奔放不羈の存在よ
僕がせめて少年の頃の我が身のように

君とうちつれて、天空をさまよい得たならば
——あの頃は、君が大空を吹き抜ける迅さの
上越すことも夢でないように思えたが——

このように切ない思いで君に祈ることもなかろうに。
おう、僕を、波のよう、葉のよう、雲のよう、吹き揚げたまえ。
僕は人生の茨の上に倒れ、血を流している。

余りにも君に似て奔放で、迅速で、誇り高かった者を
歳月の重圧が鎖につなぎ、身をかがめさせてしまった。

V

僕を　あの森のように　君の竪琴たらしめたまえ。

たとえ、僕の葉が森のように散り落ちようとも
君の壮大な楽(がく)のどよめきは

両者から、哀調を帯びながらも美しい
深い、秋の調べを得来たるであろう。君、烈しい魂よ
わが魂となりたまえ。君、猛(たけ)きものよ、われとなりたまえ。

わが死せる思想を、枯葉のよう
宇宙に吹き送り、新しい誕生を促(うなが)したまえ。
そして、この詩の呪力によって

消え尽きぬ炉から灰と火の子を散らすように
わが言葉を人類にまき散らしたまえ。
わが唇を通して、いまだ目覚めぬ大地に

予言の喇叭を吹き鳴らしたまえ。おう、西風よ
冬来(きた)りなば、春遠からじ。

英　詩　雑　抄　（前川）

羊飼の樹——ヂョン・クレア

幹はひび割れて、戦士の運命のよう
　満身傷だらけの楡の大木よ、僕は好きなのだ
君の樹蔭になった芝生によく寝ころんで
　頭上に青葉のさざめきをきくのが——
また、君の盛り上った根に腰を下して
　いまでは顧みられず、忘れられてしまった
昔のことがら、仕遂げたこと、華々しかったことなど
　のんびりと、幹を背にして、思いに耽けることが。
しかし、君は雄々しく、亭々と聳え立って
　人の世の汚れに係りのない
縹渺の想いへとたましいを誘う。
　風は永遠の歌をうたい
未来のことどもを口ずさみ、それが心を燃え立たせて
　心の断片を後の世に遺させるのだ。

百姓詩人――ヂョン・クレア

彼は小川のひそやかな音を
　すいすいと飛ぶ燕を愛した。
彼は雛菊の乱れ咲く土地を
　白雲の散らばる空を愛した。
彼には　おそろしい嵐も
　神の声そのものに思えた。
そして、夕空に雲の湧くとき
　モーゼが杖をとって立つのだった。
彼の眼に入る一切のもの
　草むらの虫けらさえも
全能の神のつくりたまえるもの
　神の故に彼はそれらを愛した。
人の世のことにはもの言わぬひと。
　童(わらべ)の時分からもの思うひと。

英　詩　雑　抄　（前川）

仕事にいそしむときは農夫。
悦びに興ずるときは詩人。

輝く星よ——ヂョン・キーツ

輝く星よ、君のよう僕も不動でありたい——
ひとり燦然と　夜空に高く懸り
ひたすらに　寝もやらず、自然に仕える隠者のよう
永遠にまぶたを見開いたまま
動き行く潮が司祭に似た勤行をつとめて
人の世の岸辺を洗いめぐるのを見まもり
または、山々や沢にやわらかに降った
新しい雪の面をじっと見つめる——
そのようでなく——しかし、常に不動に、常に変らず
私の愛人のみのり行く胸に枕して
そのやわらかな起伏をいつまでも感じ
快い不安のうちにいつまでも目覚め

いつも、いつも、彼女のやすらかな息づかいをききそのようにして永久に生きるか——息絶えてしまいたい。

僕の星——ロバート・ブラウニング

僕がある星について
　知っていることはただ
その投げかける光が
　（稜角のある宝石のように）
時には赤い閃き
　時には青い閃きだということ。
そのうちに、自分等にも見せてほしいと
　友の連中が言い出した——
赤く閃き、青く閃く　僕の星を。
するとそれは鳥のようにとまり、花のように閉じて垂れてしまう。
彼等はその上の土星を眺めて慰める外ないのだ。
彼等の星が、たとえ世界であろうと、僕の知ったことか。

英　詩　雑　抄　（前川）

僕の星は僕に魂を開いた。だから僕は愛するのだ。

いま深紅の花片は——アルフレド・テニスン

いま、深紅の花片は眠っています、いま白い花片も。
宮殿の遊歩道の糸杉の葉は揺れませんし
埃及石の水盤の金魚の眼もまばたきません。
螢は目覚めています。あなたも私とともにお目覚めなさい。

いま乳白の孔雀は　亡霊のよう　うなだれ
亡霊のよう　私に向かって仄かに光ります。

いま大地は星々にむかってダナエのように臥っています。
そしてあなたの全霊は私にむかって開いているのです。

いま流れ星は音なく流れ、あとに
輝く軌跡を残します——あなたの想いが私に残したように。

いま百合はその美しい花をぴたり閉じて
湖の胸にすべり入ります。
そのように、愛しい方よ、あなたも身を閉じて私の胸に
しのび入りなさい――私の中に消え入りなさい。

野薔薇の息吹――ヂョーヂ・メレディス

あたたかい西南風のしめっぽい翼に乗って
ただよって来る　野薔薇の香りよ。
君は、率直さとはにかみの入り交った
たとえようのない甘美な思い出をそそる
彼女と僕が　恋心にひかれて
果樹園の林檎の実の下で会い
熟れた実を真二つに断ち割って
食べるまえに汁の香りを嗅いだときのことを。
あの野薔薇の香りのする林檎も

英　詩　雑　抄（前川）

もう我が国では見られなくなったが
皮は緑色で、まるで乳搾りの雌牛を
想わせるいい勾(にお)いがしたものだ。
野薔薇は目(ま)のあたり呼び戻してくれる——
実(み)に歯をあてている少女の姿を
率直さとはにかみの入り交(まじ)った彼女の眼の輝きを
彼女が噛んだあとに自分の歯をあてたい心の疼(うず)きを。

沈黙の真昼——D・G・ロセッティ

君の両手は開かれて、爽(さわ)やかな草の茂みに横たわっている。
その指先(ゆびさき)は薔薇の蕾のよう、葉蔭から覗(のぞ)いている。
君の眼は静かにほほえんでいる。離合常ない白雲の
湧き立つ空の下に、牧場(まきば)は明るんだり、また翳(かげ)ったり——。
ふたりのねぐらをとりまいて、目路(めじ)の限り
黄金(こがね)のきんぽうげの野がひろがり、その縁辺は銀色に
おらんだぜりが　山査子(さんざし)の垣根を縁(ふち)どっている。

それは、砂時計のように静かな、眼に見える沈黙だ。
陽光の深くさしこんだ茂みの中に　蜻蛉が懸っている
――空から離れ落ちて来た　青い一筋の糸のように。
そのように、この羽ばたく時も、天上からわれらを訪れたのだ。
おう、互いにしかと、胸に抱きしめよう、不滅の賜物として
この　ふたりきり心と心を交わす　夢うつつの時を
――二重の沈黙が愛の讃歌であるとき。

六月――ウィリアム・モリス

おう、六月よ、僕たちの待ち望んでいた六月よ
この日、君は僕たちを幸福にしてくれないか。
流れを越えて、はるか彼方の豆畑の香りのこもる
快い、やわらかな風を君ははこんで来てくれる。
僕たちの頭上にはさらさらと灰色の白楊が鳴り
のんびりと雲のひろがる空は静かだし

今朝はまだ嵐の来そうな気配(けはい)もない。

見たまえ、僕たちは希望も恐れもきれいに忘れて
君に全心全霊を捧げにやって来たのだ。
それには、ここよりもよいところが外(ほか)のどこにあろう――
この楽しい流れは海のことを知らないし
都市のみじめな有様など想像もしない。
村々といえば無名も同様の、このささやかな流れ
遠い、遠い、ひっそりした、テムズの母胎なのだ。

ではここで、おう、六月よ、君の好意を僕たちは受けよう。
しかし、もしそれでも僕たちが沈んでいるように見えたら
一体何としよう。まさか君はそんなことはすまい――
僕たちを、この滅多とない楽しい夢から
覚まそうとしたり、この流れのささやき
樹の枝の葉ずれの音、小鳥のさえずりや
幾千の平和に楽しい言葉から引き離そうなどと。

春しずか——クリスティーナ・ロセッティ

冬さえ過ぎれば
　春さえ来れば
私は小鳥の鳴く
　隠れ家に行こう。

そこは山査子の蔭に
　鶫がうたい
柊の茂みに
　駒鳥が鳴く。

涼やかな温室の上高く
　アーチのようにさしかかる
蕾をつけた枝々は
　爽やかな香にみちている。

英　詩　雑　抄（前川）

快(こころよ)い香(か)に充ち
　風はそよぎ
静かに囁(ささや)く――
　「私等にわなはありません。

安心してここにお住まいなさい
　ここにひとりでお住みなさい
清らかな流れと
　苔蒸す石を友にして。

ここに日は射(さ)しますが
　蔭は深いのです。
ここには遠い海の
　ひびきがきこえるのです――
遠い、遠い、彼方からですが。」

浜辺の罌粟——ロバート・ブリッヂェズ

一本の罌粟が浜辺に生えて
晩夏に二輪の花を咲かせている。
その葉の緑は灰色がかって白っぽく
花片は黄で、よわよわしい。

思いをはせるのは従姉妹たちのこと——
露のかわりに飛沫に養われ、海を行く
荒い風に揉まれつづける自分のことを
気にかけてくれてるだろうかと。

品よい麦の連中と踊る
赤い罌粟のように恋人もなく
彼女は花を波に散らせ
ひとり佗しくふるえている。

英詩雑抄（前川）

ビンゼーのポプラ並木——G・M・ホプキンズ

僕の愛するアスペン、その風通う籠のような葉蔭は
飛びこんで来る陽光を和らげ、冷やしていたのに
みんな伐られ、伐られ、みんな伐られて
爽やかにすんなりと並び立つ樹々のうち
ただの一本も残っていない——
浮き沈みする樹々の蔭を
サンダルの軽やかさに躍らせていたのに
牧場に、河に、風さまよう、雑草の揺れなびく堤に。

われらが掘りかえし、伐るとき
伸び茂る緑を切り刻むとき
ああ、われらがどんな所業を働くか、知ってさえいたら——。
田舎はまことかよわいもので
一寸さわっても傷つき易く

なめらかな、この眼玉のよう
一寸突いても眼でなくなってしまう。
われらが掘りかえし、伐るとき
　たとえ自分たちでは
　良くなす積りでしても、かたなしにしてしまう。
後から来る者には、もとの美しさは想像もつかない。
十度か十二度、ただの十度か十二度
打ちおろしただけで消え去ってしまう
　美しい、またとない眺めが
田園の眺め、田園の眺め
　美しい、またとない、田園の眺めが。

イニスフリーの湖島——W・B・イェイツ

さあ立って、私は行こう、行こう、イニスフリーに。
そこに土と小枝でささやかな小屋をつくり
そこに豆を九畝と、蜜蜂の箱一つしつらえ

蜂音高い林の間に　ひとり住もう。

そこで私はいささかの平安を得よう、平安は徐に滴して来ようから。
朝明けの幕からこおろぎの鳴く辺へと、滴して来ようから。
そこでは、真夜中に微光がみなぎり、真昼は紫にかがやき
夕は紅雀が無数に飛び交うのだ。

さあ立って、私は行こう。夜となく、昼となく
私にきこえるのは、ひたひたと岸辺を舐めるあのみずうみの音。
大道に立つときも、灰色の舗道にたたずむときも
あの音がきこえる、私の胸の奥深く。

外国——R・L・スティーヴンスン

桜の樹にのぼれるのは
ちいちゃな僕だけだ。
僕は両手で幹をかかえ

遠く　よその土地を眺めた。

僕のすぐ眼の前の
お隣りの庭は花が一杯咲いていた。
そして僕がいままで見たことのない
外(ほか)のたくさんの場所が見えたのだ。

僕は見たのだ――川がさざ波立てて流れ
空の青い鏡になっているのを――
ほこりっぽい道が通っていて
そこを　とことこ　人が町へ歩いているのを。

もし、もっと高い樹が見つかったら
もっと、ずっと遠くが見られるだろう。
川が大きく、大きくなって
船が沢山浮かんでいる海に入るところも。

英詩雑抄（前川）

また、左右両方の道が
どんどん伸びて　妖精の国までとどき
そこでは子供たちが五時に食事をし
おもちゃがみんな活きて来るところも。

唖の兵士――R・L・スティーヴンスン

草が短く刈られた時分
僕は庭をあるいていて
芝生に一つ、穴を見つけ
兵士を一人(ひとり)、そこに隠した。

じきに春が来て　雛菊が咲き
その隠れ場所は草でかくれてしまった。
草はまるで緑の海のよう
芝生から僕の膝まであるのだ。

草の下にひとりで彼は横たわっている
深紅の外套ととんがった銃をもち
星々と太陽を
鉛の眼で見上げながら。

草が穀物のように熟れて
鎌が砥石にかけられ
芝生が奇麗に刈られると
また例の穴が見えて来るだろう。

きっと、きっと、僕は彼を見つけるだろう。
僕は僕の擲弾兵を見つけるだろう。
しかし、いろんなことがあったけれど
僕の兵士はだまっているだろう。

このささやかな存在は生きて来たのだ
春の草生い茂る森に。

英　詩　雑　抄　（前川）

そして、僕がしたいと思うことをして来たのだ。
彼はただ、その本当のことが話せないのだ。

彼は星輝く夜を見たのだ。
そして花が咲き出すのを見たのだ。
そして草の森の中を
通って行く妖精たちを見たのだ。

沈黙のうちに彼はきいたのだ
蜜蜂やてんとう虫の語るのを。
彼がひとりで寝そべっていると
彼の頭の上を蝶が飛んだのだ。

彼はひとことも話さないだろう
彼の知ってることを——ひとことも。
僕は彼を棚の上にしまって
僕自身でその物語をつくり上げねばならない。

お寝坊さん――ウォルター・デ・ラ・メア

白々とした月の光に　眼を覚ましていると
森から幽かな歌がきこえて来るのです。
「寝床から
お寝坊さん
こっそり下りて、いらっしゃい。
お月様が覗いていらっしゃる。
山査子が咲いてますよ。
おねんねをやめて、妖精たちと一緒に
お坊ちゃん、こちらで遊びましょ。」

窓の外をのぞくと、白々とした月の光に
森の葉っぱはまるで雪のよう――
「ほら、お聴きなさい
楽の音がもれて来ます。

英　詩　雑　抄　（前川）

ちいちゃな提灯が触れあってきらめきます。
呼び声がします。
遠く、遠く、青い空がゆらめいています。
浮んだり、羽ばたいたり
歌いながら――歌いながら
私たちは光と影の中を漂うのです。」

朧の月の光に　僕はそっと身をかがめ
靴下と靴をはきました。
しかし、甲高い素敵な歌声はかすかになって遠のき
灰色の朝がのぞきこんで来ました。
僕を呼んでいた声は　鵜と駒鳥が
薄闇と露のうちに起き出していたのでした。

兎――ウォルター・デ・ラ・メア

畑の黒いみぞに

今夜、僕　魔物の兎を見たよ。
あいつ、やわらかい耳をかしげ
明るいお月様をちょいと見て
青ものをかじっているのさ。
「シーッ、魔物のうさぎめ」と小声で言ったら
亡霊のように畑をすっ飛んで
あとにはお月様が照るばかり。

蝿――ウォルター・デ・ラ・メア

小さな蝿に　小さなものが
　何と大きく見えること。
薔薇の蕾は　羽根蒲団みたい。
　その棘(とげ)は　槍のよう。
露の玉は　姿見(すがたみ)。
　髪の毛は　金(きん)の針金(はりがね)。

芥子種の細かな粒は
　燃えさかる炭火のよう。

一塊のパンは小高い丘。
　雀蜂は　おそろしい豹。
一撮みの塩の輝くことといったら
　羊飼の眼にうつる　仔羊のよう。

耳すますものたち——ウォルター・デ・ラ・メア

「そちらに誰かいませんか」と旅人は言った
　月に照らされた戸を叩いて。
彼の馬はしんとした中に　羊歯の生い茂る
　森の下草を喰みつづけていた。
すると、鳥が一羽　塔から飛びたって
　旅人の頭上を掠め去った。
それから彼は、ふたたび戸を叩いて

「誰かいませんか」と言った。
しかし、旅人のところに降りて来る者はなかった。
　葉に縁どられた窓から首を出して
困ってじっと立っている旅人の
　灰色の眼に見入る者もなかった。
しかし、このひっそりした家に住んでいた
　一群の幻の聴き手だけが
月の静かに照る中できき耳を立てていた
　――人間の世界から来るその声に。
がらんとした広間につづく暗い階段の
　仄かに月のさすあたりに寄りかたまって
孤独の旅人の訪ないにかき乱された
　空気の中でじっときき入っていたのだ。
旅人は心中に感じとった――彼等の異様さと
　自分の呼声に答える　彼等の沈黙を。
――その間、葉にさえぎられた星空の下で
　馬は動き、暗い芝草を喰みつづけたが。

彼は突然、まえよりも烈しく戸を叩き
　上を見上げて言った――
「では、彼等に伝えて下さい、私は来たが誰も答えなかったと
　私は約束を守ったと」。
その時醒めていた只一人の男からの声は
　彼の語った一語、一語は
薄暗い静かな家にひびき渡ったが
　きき手たちは身じろぎ一つしなかった。
そう、彼等は聞いたのだ、彼が鐙に足をかけ
　石に蹄鉄のひびく音を
そして、憂々たる蹄の音が消え去ると
　沈黙がおもむろに寄せ返して来るのを。

　　過ぎ去ったすべて――ウォルター・デ・ラ・メア

森はとても古いのだ。
　それから、三月の風が目覚めると

野薔薇の枝から
　ほころび出す蕾は
その美とともに、実に古いのだ。
　ああ、知るものは誰もいない——
何という、荒涼とした世紀の数々を
　薔薇の花は溯るかを。

谷川はとても古いのだ。
　それから、紺碧の空の下に
つめたく眠る雪から
　流れ出る小川は
来ては去った世のさまざまの
　永い歴史をうたい
その一滴、一滴は
　ソロモン王のように賢いのだ。

われら人間も　実に古いのだ。

英　詩　雑　抄（前川）

われらの見る夢は
遠い昔　エデンの園で
　エヴァのナイティンゲールの語ったもの。
われらは覚めて、しばらく囁きを交すが
　その日も過ぎさると
沈黙と眠りは
　不凋花（アマランス）の野のようにひろがるのだ。

雷雨――ウィリアム・ヘンリ・デイヴィス

僕の心に雷雨が宿（やど）って
　何時間も重苦しく腰を据（す）えるのだ。
そいつが僕に言葉を降（ふ）らせるまで
　僕の思いは萎（しお）れた花だ。
不機嫌にだまった小鳥だ。

だが、来るがいい、暗い雷雨よ

何時間も腰を据えるがいい。
君が僕に言葉を降らせるとき
　僕の思いは踊りはねる花だ。
よろこび一杯に歌う小鳥だ。

雨――ウィリアム・ヘンリ・デイヴィス

僕にはきこえるのだ、葉っぱが雨を飲んでるのが。
僕にはきこえるのだ、梢のゆたかな葉が
一滴、また一滴と
下のまずしい葉に与えているのが。
近くでこの緑の葉たちが
ごくりごくり飲んでいる音は気持のいいものだ。

そして、この雨がやんでしまって
太陽が顔を出すと
暗い、円い滴の一滴、一滴に

英　詩　雑　抄　（前川）

素晴らしい光がみなぎるのだ。
僕は太陽がきらきら輝くといいと思う。
それはとてもたのしい光景だ。

暇――ウィリアム・ヘンリ・デイヴィス

この人生は一体何なのか、もし気にかかる事ばかりで
僕たちに立ちどまって眺める時がないならば。

樹の枝の下に立ちどまって
羊や牛みたいにゆるゆると眺める時がないならば。

林を通りすぎるとき、栗鼠の連中が
木の実を草むらに隠すのを見る時がないならば。

明るい昼中に　夜の星空のよう
一杯に星煌めく小川を見る時がないならば。

美人の眼(まな)ざしに頭をめぐらし
その足のおどる運びを見まもる時がないならば。

眼にはじまった彼女の微笑(ほほえみ)が口許(くちもと)で
豊かなものになるまで待つ時がないならば。

まこと哀れな人生だ、もし、気にかかる事ばかりで
僕たちに立ちどまって眺める時がないならば。

思想の鈍行列車——シーグフリード・サスーン

しんとした、夜のあるひととき、ひとり
耳すまし、書きかけのものから眼をあげて
渓間をすぎる鈍行列車の音をきく。そして「ああ
一時五十分のが行くな」とひとり思う。何かしら
その時を違(たが)えぬ運行が私の気持を安らかにし
自分の世界が安全さと親しさを増したように感じ

英詩雑抄（前川）

明日(あす)も同じだと思い、来年もそうあってほしいなと思う。
「あの列車には平時の安らぎがある。」無用の警笛を鳴らし
車輪でレールをごとごとさせながら消えさるのがきこえる。
「あの列車も古馴染みのひとりだ」——そう思うのだ。

八月の真夜中——トマス・ハーディ

I

傘のあるランプと　揺れる鎧戸
それに、遠くの階からきこえて来る　時計の打つ音。
この舞台に登場するのは——羽根と、触角と、刺(とげ)を具えた
ががんぼと、蛾と、そしてまるはなばち。
他方、私の開いた頁には、眠そうな蝿が一匹
とまって、手をこすり合わせている……

II

こうして、我等　五者は会するのだ、この静かな場所で

この時の一点――この空間の一点に。
――私の客人たちは私がペンで書いたばかりの行を汚し
ランプにあたって、仰向けにひっくりかえる。
「彼等は、神のいとささやかな生物」と私は考える。しかし、どうか。
彼等は私の知らない大地の秘密を知っている。

郊外の雪――トマス・ハーディ

どの枝も厚く積っている。
　そのため　どの小枝もしなっている。
どの枝の分れ目も白い蹼みたいだ。
　どの街路も舗道も静まりかえっている。
ある雪片はとまどってよろよろ上に行きかけるが
ひらひら舞い下りて来るのに出逢い、また向きを変えて落ちる。
　柵はくっつき合って壁のようになっている。
　雪はふわふわと落ちるが、一そよぎの風もない。

雀が一羽　樹にはいりこんだ。
　すると、すぐさま
彼の小さな身体の三倍程の雪の魂が
落ちて来て、彼の頭と眼に雪しぶきを散らし
　彼をひっくりかえらせ
　危うく彼を埋めそうになる。
そして下の枝に落ちるが、その飛ばっちりで
積っていた別の魂がどっと落ちかかる。

　階段は真白な斜面にかわり
　そこを危っかしい足どりで
　度せて大きな眼をした黒猫が上って来る。
　そして私たちは彼を迎え入れる。

テムズ河の鷗――エドマンド・ブランデン

なんと素晴らしいことか

ロンドン橋上で不敵な眼をした海鳥の舞うのを見
彼等の叫びをきくのは――彼等は軽く投げたパン屑のために
彼等の富と、自由と、スピードと輝きを投げてよこすのだ。
　　それに素晴らしいのは
通行の人々がこれらの鳥に惹かれて足をとめること――
彼等は微笑みながら言うのだ「何と馴れてるのだろう」と。
　　――「何と馴れてる」って。
それは海の只中で星が舵取りに見せる好意に似て
真夜中に親しむ星のよう　人界に遠い。
遠い、過ぎた日の声のたのしさ
森に咲くアネモネの近さに似て
女王ダイドーの亡霊のよう　近寄りがたい。

時よ、君、ヂプシーの爺よ――ラーフ・ホヂスン

時よ、君、ヂプシーの爺よ
　　足をとめないか

英　詩　雑　抄（前川）

君の幌馬車(キャラバン)をとどめないか
　ほんの一日だけ。

何なりと　君にあげよう
僕のお客になってくれたら。
君の小馬には鈴をつけよう
　銀造りの最上のものを。
君には　金工に打たせよう
　素敵に大きな黄金の輪を。
孔雀の群は　君に叩頭(こうとう)し
　可愛い少年たちはうたい
おう、そして、美しい少女たちは
　山査子(さんざし)の花綏(はなづな)で君を飾ろう。
時よ、君、ヂプシーの爺(じじい)よ
　どうして先を急ぐのか。

先週は　バビロンに

昨夜は　ローマに
今朝(けさ)はポール寺の円屋根(ドーム)の下の
群衆の人波の中に。
ポール寺の時計の下で
君は手綱を引きしめるが――
それも　ほんの一瞬のこと
また立ち去ってしまうのだ
まだ胎内に、あやめもわかぬ
どこかの都市に向かって。
それとて、墓場に入らぬうち
また、外(ほか)の都市へと。

時よ、君、ヂプシーの爺(じじい)よ
　足をとめないか
君の幌馬車(キャラバン)をとどめないか
　ほんの一日だけ。

徒労——ウィルフレド・オーウェン

彼を　日の当るところに　移してくれたまえ——
その触手は　かつてやさしく　彼を目覚めさせたのだ
——故国で、まだ種蒔かぬ　畑のことを囁いて。
いつも彼は　それで目を覚ました——フランスでも
この雪の、この朝まで。
若しいまも　彼を眠りから　起こし得るものがあれば
それを知るものは　この慈み深い　老いた太陽であろう。

思え、如何にしてそれが　種子を目覚ますかを——
かつては　冷えた星の土を　目覚ましたかを。
かくも愛んで　そだて上げた四肢が、たくましい
両の脇腹が——まだ温かみが残るのに——硬直して動かないのか。
土が背高く伸びたのは　このためだったのか。
——ああ、何のため、日光は愚かしくも

なまじ　大地の眠りを破ろうと　骨折ったのだろう。

川と海——T・S・エリオット

私は神々のことはよくは知らないが——私は思うのだ、川は
たくましい褐色の神だと——むっつりして、馴れず、御(ぎょ)しにくく
ある程度までは辛抱強く、はじめは境界扱いされて
交易の手段に役立つが、気はゆるせず
それから、橋梁の建設者にとっての単なる課題となる。
一旦課題が解けると、都市の居住者達に
褐色の神は殆んど忘れさられる——しかし、常に執念深く
季節が来れば荒れ狂い、破壊者となり、人間が知っていながら
忘れていたことを思い知らせる。機械の崇拝者たちからは
祭られもせず、宥(なだ)められもせず、待ち、見守り、待っている。
彼のリズムは子供部屋の枕辺に流れ入り
四月の前庭のにおいうるしに伝わり
秋の食卓の葡萄の香りにひそみ

冬の瓦斯燈下の夕の集いの中にある。

川はわれらの身の内にあり、海はわれらをとりまいている。
海は陸の縁辺でもある。その縁辺は海のはいり込む
花崗岩であり、また海が太古の、別種の生物のしるしを
打ち上げる岸辺でもあるのだ――
海星、兜蟹、鯨の背骨。
海はまた海岸の水溜まりに、もっとこまやかな海藻の類や
イソギンチャクを生えさせて、我等の好奇心をそそる。
それは我等の失くしたものを打ち上げる――ちぎれた地引網
毀れた海老捕りかご、折れた擢
異国の死人の持ち物。海には多くの声がある。
多くの神々と多くの声がある。

塩気は野薔薇にあり
霧は樅の木にしみ通っている。
海の哮り
海の叫び、それらは別々の声なのだが

よく一緒になってきこえる。索具のすすり泣き
波の上に砕ける波の脅かし(おびや)と愛撫
花崗岩の歯にひびく海の遠鳴り
近づく岬からきこえて来る警告の咽び(むせ)声——
それらすべては海の声だ。それに、うねりに乗り
本土に向いて鳴りひびく浮標(ブイ)と鷗。
無言の霧の圧迫の下に
葬いの鐘は
時を計るが、それは我等の時でなく、悠揚とした
大うねりの鳴らす時——その計るものは
時計の報ずる時よりも、また
気づかい、愁(うれ)いに沈む女たちの計る時よりも尚古い時——
女たちは寝床で眼をさまし、未来をかぞえ
真夜中と暁との間に
織りをほぐし、巻きをほどき、ほつれを解いて
過去と未来をつづくり合わせようとするが、過去は凡(すべ)て欺瞞
未来に未来がなく、時は停止し

英　詩　雑　抄（前川）

時に終りのない　明方(あけがた)まえの時——
そして、いま在り、また劫初からあった大うねりの
打ちならす
鐘。

註　右に訳した中に長詩の一部を採ったものや、元々表題を欠いているもの（訳者が便宜的につけたもの）があるので、左にその出所を記して置く。なお、ロバート・ヘリックの詩は原詩を参照したい方の参考のため、その拠った原本 *Hesperides* (J. M. Patrick 編 The Complete Poetry of Robert Herrick, 1963, Anchor Books に拠る）の収載順序（H-）を附して置いた。

一三九頁　ソネット五首　Shakespeare's *Sonnets*, No. V, No. XVIII, No. XXX, No. LXXIII, No. CIV.
一五四頁「私の富」H-724.
一五六頁「私の望み」H-1036.
一五七頁「私を語る」H-170.
一五七頁「熟れた桜んぼ」H-53.
一五八頁「臥所によこたわるアンシア」H-104.
一五八頁「ダイアニーミに」H-160.
一五九頁「桜の花に」H-189.
一六〇頁「乙女らよ、時を惜しめ」H-208.
一六一頁「木の花に」H-467.
一六二頁「わが詩はわが柱」H-211.
一六四頁「サムソンの欺き」*Samson Agonistes*, 1-22; 64-109.

一六八頁 「内なる光」 *Paradise Lost*, Bk. III, 40-55.
一八二頁 「ベリンダ」 *The Rape of the Lock*, Canto II, 1-28.
一九五頁 「展望」 *The Task*, Bk. I, 154-176.
一九七頁 「山上の眺め」 *The Task*, Bk. I, 278-325.
二〇〇頁 「冬の朝」 *The Task*, Bk. V, 1-57.
二一一頁 「田舎の夜」 *An Evening Walk* (1793), 433-446.
二一二頁 「ウーリー湖畔の夕陽」 *Descriptive Sketches* (1793), 332-347.
二一三頁 「スノウドン登頂」 *The Prelude* (1805), Bk XIII, 10-65.
二一七頁 「詩人の夢」 *Prometheus Unbound*, Act I, 737-49.
二二八頁 「いま深紅の花片は」 *The Princess ; A Medley*, VII, 175-88.
二三〇頁 「沈黙の真昼」 *The House of Life*, sonnet XIX.
二三五頁 「浜辺の晩夏」 *The Shorter Poems* (Enlarged ed.), 1931, Bk. I, 9.
二六一頁 「川と海」 *Four Quartets, The Dry Salvages*, I, 1-48.